

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第 15 号）

「第 20 回無形文化遺産保護条約政府間委員会、2025 年を振り返って」

2025 年 12 月 26 日

ユネスコ日本大使の加納です。

2025 年も残りわずかですね。パリに着任したのは、ちょうど 2 年前の今日、2023 年の 12 月 26 日でした。先日もトロカデロ広場の公園内にあるクリスマス・マーケットで、ホットワインを飲みながら、着任当初のことを思い出していました。



トロカデロ広場のクリスマス・マーケット

今回は年内のユネスコ関連行事のほか、この一年を振り返ってみたいと思います。

（ユネスコ総会のフォローアップ）

サマルカンドでのユネスコ総会の後、パリに戻ってからはフォローアップの会議がいくつかありました。

11 月 20 日には、総会の時に行われた執行委員会選挙結果を受け、新たな

委員国構成による最初の執行委員会（第223回）が行われました。これは執行委員会のビューローメンバー（議長、副議長、各小委員会議長で構成）を選出するためのもので半日で終わりました。議長は地域グループの持ち回りのため、今回はアラブ・グループからヒンザブ（Nasser Hinzab）カタール大使が選出されました。副議長は6つの各地域グループから各1名選出されます。アジア太平洋グループから日本の私が副議長に選出されました。

また、ユネスコ総会の下におかれる13の下部機関も、サマルカンドで選出された新たなメンバー国構成で順次開催され、ビューローメンバーが決定されました。

私は、総会下部機関の1つである、「国際コミュニケーション開発計画（IPDC: International Programme for the Development of Communication）」政府間理事会の議長に選出されました。任期は2年です。事前調整により候補者は私一人で、拍手(acclamation)で選出されました。前議長のチリ大使からバトンタッチされた後は、副議長、書記の選出手続きを進めました。

IPDCは、ユネスコの担当分野の一つであるコミュニケーション・情報に関係する理事会で、ユネスコが行う世界各国の表現の自由についての調査、ジャーナリストの安全対策、途上国のメディアのキャパビル事業を支援しています。議長に就任したこともあり、この分野にもしっかりと取り組んでいきます。



「国際コミュニケーション開発計画（IPDC）」政府間理事会

（インド・デリーでの第20回無形文化遺産保護条約政府間委員会）

12月7日から13日には、インド・デリーで第20回無形文化遺産保護条約政府間委員会が開催されました。無形文化遺産保護条約の会議は、例年この

時期に行われており、昨年１２月のパラグアイでの第１９回会合では、日本の「伝統的酒造り」が新規登録されました。デリーは、昨年７月に「佐渡島の金山」が登録された世界遺産委員会が開催された地でもありますので、一年半ぶりの再訪です。今回は世界遺産「レッド・フォート（赤い城）」の敷地内で開催されました。



第２０回無形文化遺産委員会

今回、日本からは、以下の３つの既存登録案件に個別項目を追加する拡張提案を行っており、１２月１１日に「記載」登録が決定されました。

○「伝統建築工匠の技：木造建築物を受け継ぐための伝統技術」

（「手織中継表（畳表の一つ）製作」を追加）

○「和紙：日本の手漉和紙技術」

（「越前鳥の子紙」（福井県越前市）を追加）

○「山・鉾・屋台行事」

（「常陸大津の御船祭」（茨城県北茨城市）、「村上祭の屋台行事」（新潟県村上市）、「放生津八幡宮祭の曳山・築山行事」（富山県射水市）、「大津祭の曳山行事」（滋賀県大津市）を追加）





日本の三つの登録申請案件（出典：ユネスコ）

これらの案件については、いずれも１１月に評価機関からユネスコ無形文化遺産代表一覧表への「記載」勧告が出されていたので、登録は想定していましたが、やはり正式決定を迎えると喜びとともにホッとした気持ちになります。新たに追加になった地域では、関係者の方々がパブリックビューイングで委員会の模様をご覧になっていたと伺っていますので、喜びもひとしおだと思います。私からは日本政府を代表して、感謝スピーチを行いました。

今回の登録は、既存登録案件の拡張だったこともあり、昨年の「伝統的酒造り」の新規登録に比べると、報道ぶりも控えめだったかも知れません。ただ、世界遺産との関連性（畳表）や、技術の継承（和紙）、地域間での知見・経験の共有（屋台行事）など、無形文化遺産保護条約の趣旨に則った形で登録を提案しており、他国にとってもモデルとなるような、国際的に高く評価された登録だったと思います。



日本関連案件の登録を受けた感謝スピーチと登録証書の受け取り

今回の無形文化遺産保護条約政府間委員会では、合計６７件が登録されまし

た。

特に印象に残ったのは、主催国インドの伝統的祭り「ディーワリー」。登録の瞬間、無数のインド人の踊り手達が現れて、パフォーマンスを繰り広げる光景は圧巻でした。

また、スイスの「ヨーデル」の独唱も印象的でした。



インドの「ディーワリー」(左)とスイスの「ヨーデル」(右)

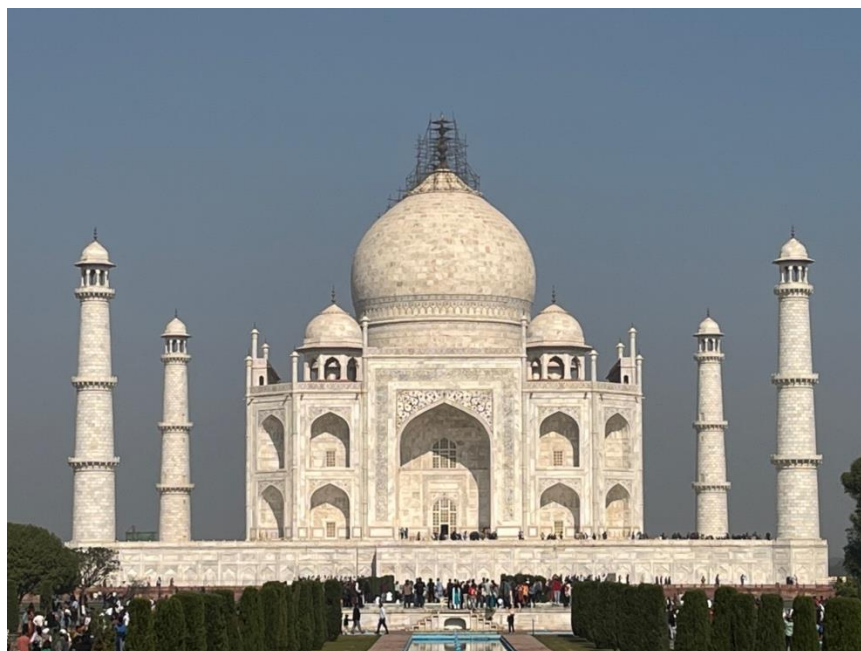
食文化では、エジプトの国民食コシャリ (Koshary) です。コメ、パスタ、レンズ豆、ヒヨコ豆、揚げタマネギを混ぜたものにトマト・ソースをかけた軽食です。今年一月にエジプトを訪れた時に初めてトライしてみましたが、あっさりしていてなかなか美味でした。登録後に早速会場内で振る舞われていたので、再び食することが出来ました。各国の様々な文化をその場で体験できるのが、無形文化遺産保護条約政府間委員会の醍醐味といえます。



無形文化遺産に登録されたエジプトの国民食「コシャリ」

なお、今回のデリー出張では、昨年も訪れた世界遺産「フマーユーン廟」、
「クトゥブ・ミナール」に加え、デリーの南東200kmの所にある「タージ・

マハル」、「アーグラ城」を訪れました。



タージ・マハル（上）。アーグラ城（下左）。フマーユーン廟（下中）。クトゥブ・ミナール（下右）

「百聞は一見にしかず」と言いますが、無形文化遺産であれ世界遺産であれ、実際に自分の目で見て体験することが、多様な文化の理解につながると改めて実感しました。

パリに戻った後は、無形文化遺産保護条約政府間委員会、世界遺産委員会の委員国、ユネスコ事務局関係者を招いたレセプションを開催しました。今回の日本提出案件の登録に謝意を表明するとともに、日本が来年の無形文化遺産保護条約委員会委員国選挙に立候補しており、世界各地の無形文化遺産の保護・伝承に更に貢献していくとの決意を述べました。また、来年の韓国・釜山での世界遺産委員会で審議予定の日本の推薦案件「飛鳥・藤原の宮都とその関連遺産群」について紹介し、登録への期待を表明しました。



無形文化遺産保護条約政府間委員会、世界遺産委員会、ユネスコ事務局関係者を招いたレセプション

（２０２５年を振り返って）

２０２５年は、ユネスコにとっても色々な出来事がありました。

最も大きな出来事は、米国の政権交代、第二次トランプ政権の発足に伴い、米国が３度目のユネスコ脱退を表明したことでしょう。２年前のバイデン政権時にユネスコ復帰を果たしたばかりでしたので、残念なことです。最大の分担金拠出国である米国の脱退がユネスコ予算に大きなインパクトをもたらしていることは言うまでもありませんが、それ以上に大きいのが、多国間主義の理念に与えるインパクトです。これはユネスコにとどまりません。

今年は、第二次世界大戦終結、国際連合発足、ユネスコ憲章採択から８０周年の節目の年でした。戦後８０年の間、国連を中心とするルールに基づく国際秩序とそれを支える米国を中心とする西側諸国というのが、我々が所与としてきた国際社会の基本的構図でしたが、今年は、それがかつてないほど揺らいだ年のように思います。そうした揺らぎが最も顕著に表れた場の一つがユネスコと言えます。

８年ぶりのユネスコ事務局長の交代も大きな変化です。フランス出身のアズレー事務局長から、エジプト出身のエル・アナーニー新事務局長にバトンタッチされました。初のアラブ・グループからの事務局長です。このほか、執行委員会議長がカタール、総会議長がバングラデシュと、ユネスコの主要３ポストがムスリム諸国で占められるのも初めてです。多国間主義を巡る状況が厳しい

中、ユネスコの新体制が発足したわけですが、エル・アナーニー新事務局長の手腕に期待しつつ、我々加盟国としても支えていく必要があると考えています。

今年は日本とユネスコの関係にとっても節目の年でした。日本がユネスコに加盟申請を行ったのが、今から75年前の1950年12月。正式加盟を果たしたのは、翌1951年の7月、サンフランシスコ平和条約署名の2ヶ月前です。まだ占領が続く中で、日本の国際社会への復帰の足掛かりとなったのが、ユネスコであったと言えます。「人の心の中に平和の砦を築く」とのユネスコ憲章の理念に強く共感した草の根の活動の後押しもあり、加盟を果たした日本は、過去75年の間、一貫してユネスコのあらゆる分野での活動を支えてきました。

来年は、日本のユネスコ加盟75周年です。これまでの揺るぎない実績を踏まえ、ユネスコでの日本外交を展開していきたいと考えています。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

良いお年をお迎えください。

来年のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大